

2023年10月8日 主日礼拝

説教題「神の国の幸いを生きる」ローマ信徒への手紙 8章 31～38節

主任牧師 加藤 誠

「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成して下さるのです。」(ローマ信徒への手紙8章34節)

先週紹介した「ハイデルベルク信仰問答」の問1の答えには続きがあります。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、  
わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであることです。

この方は御自分の尊い血をもって、わたしのすべての罪を完全に償い、  
悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。

また、天にいますわたしの父の御旨でなければ、髪の毛一本も落ちることが  
できないほどに、わたしを守ってくださいます。

そしてまた、ご自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この  
方のために生きることを心から喜び、またそれにふさわしくように整えても  
くださるのです。

ここには主イエスの『福音』の内実である「罪の救い」「悪の支配からの解放」「聖霊の助けの確かさ」が端的に語られています。

例えば、大井教会の聖書日課は先週まで旧約聖書の「エステル記」でした。バビロン捕囚の解放後もペルシャ帝国の町々に残り暮らし続けたユダヤ人たちの、迫害下での苦闘を描いた物語です。ハマンという悪者によるユダヤ人虐殺の策略が神によって打ち破られて、ユダヤ人たちの憂いが喜びに、悲しみの日が祝いの日に変えられていく、ある意味で「痛快な」ストーリーなのですが、新約聖書のイエス・キリストの福音を知らされた者として読む時、胸の中にざらざらしたもの感じざるをえない物語でもあります。例えば、ペルシャ王という絶大な権力を握った王と大臣たちの浅はかで愚かな姿があぶりだされていきます。たぶんに脚色されて強調されているのですが、王と大臣たちは大事なことを決めるのにいつも酒を飲んでいるのです。王は自分の妻である王妃を、宴会の余興の盛り上げ役程度にしか思わず、飽きたなら他の女性に取り替えればいいという態度です。またペルシャ王は大臣ハマンの入れ知恵でユダヤ人虐殺を命じる法律に王の印鑑を押して全国に配布するのですが、あとになって王妃エステルが歎願しますと「そんなひどい法律を定めたのは誰か？」と憤ってハマンに全責任を押し付け、処刑するのです。何という無責任。わたしは読みながら「その法律に王の印鑑を押したのはお前ではないか！」と突っ込みたくなりました。一方で、虐殺の危機を免れたユダヤ人たちは、最後に自分たちを抹殺しようとしたハマンと息子と仲間たちを皆殺して喜びに浸るのです。

敵を殺さなければ自分たちが殺される、暴力には暴力で抵抗しなければ現実には生きていけない、人間の悲しく哀れな姿に考えさせられる物語でもあります。それは昔話ではなく、私たちがいま生きている世界そのものの物語なのだと思います。

その私たちが生きる世界にキリストは神の愛をあらわすために生きてくださり、十字架の道を歩まれました。神の愛を示されたキリストを邪魔者扱いして十字架に迫りやる人びと。主イエスに従いきれず、逃げ出してしまふ弟子たち。信仰においても愛においても、神に従いきれず、貧しく小さく、悪に対して戦いえない私たちの姿があります。しかし、その私たちをなお求め、悪から救い出すために祈り続けてくださる神の愛が十字架において示されたのです。今朝、ローマ書8章でパウロが語っている通りです。わたしはこの箇所を読むたびに、西南学院大学神学部の青野太潮先生が話してくださったエピソードを思い起します。ある牧師が青野先生に尋ねたそうです。「わたしの妻は長い間病気を患い、体だけでなく心も弱って、最後には『死ぬのが怖い』と言って亡くなっていきました。最後の肝心な時に信仰を失ってしまったわたしの妻は神の御許に迎えられているのでしょうか」と。その問いを聞いて青野先生はローマ書8章を読まれたそうです。「たとえ私たちが神を見失い、暗闇の中に一人沈むときにも、キリストの愛から私たちを引き離すことはできない。どんなものもキリストにおいて示された神の愛から私たちを引き離すことはできないとパウロははっきりと告白しています。先生、大丈夫ですよ」と。

この青野先生つながりでもう一つお話しすると、先生が最近書かれた本にこんなエピソードが紹介されています。青野先生が福岡から東京行きの飛行機に乗った時のこと。座席の前に小さな男の子とお母さんが座っていた。ところが飛行機に乗るや男の子が「福岡のおばあちゃんのところがいい。東京に帰りたくない」と言って泣き騒ぎ、母親がどんなに注意しても泣き止まず、飛行機が離陸しても泣き止まない。とうとう母親は言います。「そんなにおばあちゃんのところがいいなら、この窓から飛び降りなさい!」と。それを聞いた男の子は「一人で飛び降りるのはいやだ。お母さんと一緒じゃないといやだ」と叫んだのでした。よほどおばあちゃんの家で楽しい思いをしたのだらうなと微笑ましく思いながら、青野先生はこの男の子の言葉にマタイ10:29「一羽の雀さえ、父の許しがなければ地に落ちることはない」の箇所を思い出されたそうです。新共同訳は「父の許しがなければ」と訳しているが、原文は「父なしに」が正しい。つまり、父なる神は雀が死ぬのを「許可する」のではない。神は「雀と共に死ぬ」のだ。それほどまでに私たちは神の愛の中に大切に覚えられている一人ひとりなのだ…と。

この神の真実の愛に支えられて、どれほど暗闇に覆われた世界であったとしても、どれほど失望と悲しみに覆われたとしても、神の国のビジョンに向かって顔をあげて生きていく。神の愛を互いに分かち合い、届けあい、励まし合って歩いていく。そのような「神の国の幸いを生きる命」に私たちは招かれているのです。